



殺意

水野泰治

集英社

著者略歴

昭和2年神奈川県川崎市生れ。
雑誌編集者を経てフリーのライターとなる。故山手樹一郎氏に師事、同人誌「新樹」に参加。女性週刊誌等を仕事の舞台として現在に至る。

殺意

一九七九年二月一〇日 初版発行
一九七九年二月二〇日 二版発行

定価 七八〇円

著者 水野泰治

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一〇
郵便番号 一〇一

出版部 (〇三) 二三〇一六三六
電話 販売部 (〇三) 二三八一二七八

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えます。

©1979 T. MIZUNO Printed in Japan

0093-772179-3041

目 次

まがらぬ指

7

傾ける耳

35

怒りの眉

70

闇さぐる足

100

ホメロスの髭

138

そして心

222

一滴の血

174

装丁 三嶋典東

殺

意

まがらぬ指

1

列車は速度をゆるめた。車窓からさしこむ朝の陽光を、すばやく払っては飛び去っていた電柱が、すこし間遠く流れはじめると、デッキは、背負い子とよばれる女行商人たちの魚くさい体臭で満ちた。

「どこサ行ぐだが、あのおなごア？」

「川部で乗ったでねえの、東京がら来ただべの」

「女優でねべが？」

かがめた背のブリキ鍮や、箆をぶつけあわせながら、背負い子たちがささやきかわした。

五能線下りの古びた車内に、象牙色のロングコートををはおった若い女性が、列車のスピードを計るかに窓外を見つめていた。端正な鼻梁の線のむこうに、遠いひろがりでつづくリンゴ畑の剪定をおえた枝々が、微細な網目

模様をかたちづくりながら、ゆっくり動いている。

と、その女が不意に立った。半身をひねってショルダ―バッグを肩にしたとき、コートの裾がひるがえって、裏地のサーモンピンクがきらめいた。プラットホームの屋根が日ざしをさえぎり、先頭の車窓から急速にかがやきが失われて、その最後の光線が彼女をよぎったので、裏地のピンクは、花よりあざやかに背負い子たちの瞳を射た。

「東京だバ、春だべの……」

背負い子の婆がつぶやいたとき、列車はきしんで揺れ、増掛駅のせまい一本だけのホームにとまった。

四月であつた。だが岩木山は純白で、風は痛いほどつめた。小さな駅舎を出ると、碎石を敷きつめた簡易舗装の広場はしらじらとまぶしいのに、リンゴ集荷所の倉庫が濃い影を落とす北側には、泥と埃にまみれた雪の小山が凍っていた。

ガレージに三台の小型車を並べたタクシー会社は、倉庫の端にあつた。象牙色のコートの女は、ブーツのヒールを鳴らしてガレージに近づくと、あわてて制帽をかぶりなおして出てきた若い運転手にたずねた。

「毎朝新聞の記者さんに会いたい。この町にも、毎朝

の通信部、あるでしょう？」

「へ？……」

「タクシーで、何分ぐらいの距離かしら」

「いやいや、毎朝の坂本さん家だバ、わずかそこだス。倉庫のむこう側ス、そこサ右へまがつてねシ……」

「あら、そう、わかりました。ありがとうございます」

その路地の左右には、軒のひくい長屋がつらなっていた。奥の一軒、ガラス戸に、へ毎朝新聞増掛町通信部と四角くペンキの文字を入れた家の前には、泥の飛沫をつけたオートバイがとめてあった。

女は、建てつけのわるいガラス戸に力をこめて、歌うように声を張った。

「ごめんくださいませ……」

同時に、正面のすすけた障子がひらいた。蓬髪と不精ひげが、じじむさく見せているが、まだ四十前だろう。へ毎朝新聞と黄色いネームを胸に縫いとったジャンパーを着て、膝のふくらんだズボンの裾から、大きな素足をむき出しにした男だ。

「だれ、あんた？」

男は、三坪ほどの土間を板張りにして、事務机を一脚据えただけのそこへおりと、うしろ手に障子をたてき

った。

「わたくし、週刊『女性世界』の取材で東京からまいりました、山本夕希子と申します。あの、あなたがこちらの……」

「そう、増掛町の通信員、坂本健造だが」

夕希子がさし出す名刺を受けとって、坂本は胡乱なもので見る目で、彼女の黒いブーツの爪先から、長い髪をひつつめてポニー・テールにした頭のとっぺんまで、見あげ見おろした。

「わたくし、北津軽までまいりましたのは、はじめてなんです。東京では、もう桜が咲くというのに、やっぱり、こちらは寒いですねえ」

「旅の記事でも書くんかね。だったら、日本の秘境なんてオーバーな書き方はやめてほしいな」

坂本は、夕希子の名刺を机の上に投げて、椅子をひき寄せた。

「いえ、旅の取材じゃないんです。太刀川徳太郎という人について、すこし調べたいことがあってきたんです」

椅子がいやな音をたてた。坂本は、眉間に深い皺を刻んで、いま置いた名刺をとりあげた。夕希子は、弾ん

だ口調で語り出した。

「太刀川徳太郎、もちろん、ご存知でいらっしやいますわね。心臓病で長くわずらっていた老妻を絞殺して、全国的に話題になった、あの太刀川さんです。あのかたの現在と、その周辺を取材して、来週号の記事にしたいんです。ぜひ、ご協力いただきたいんですけど」

坂本は、週刊『女性世界』記者——とある名刺を見つめていた。その姿勢のまま、つぶやいた。

「あんた、いったい幾つかね」

「え……？」

「いつから、こんな仕事をしているのかね」

顔をあげて、見つめてきた男の目が、夕希子の神経を逆撫でした。夕希子は、相手の瞳に視線を射こんでこたえた。

「二十五歳です。この仕事に就いて、今年で三年になります」

坂本は目をそらして、舌打ちした。

「だいたい、週刊誌ってえのは、わしらにや理解がつかんな。あんたが、わざわざ東京からやってきて調べたいという事件は、ありや三年前のことですよ。犯人はその場で自首して、裁判は一審で執行猶予。検事側も控訴し

たわけじゃなし、なにもかも落着^{らくもや}して、犯人の太刀川徳太郎は、あんた、以前の勤め先に復職して、現在、まじめに働いとるんだ。それをいまさら、なにをほじくって、どう書こうっていうのかね」

「三日前に、東京の向島で、重症の脳性小児マヒ後遺症をもつ二十三歳の娘を、六十四歳の父親が絞殺した事件がおきたのを、ご承知でしょうか」

こうした場合、ひどく切り口上になるのは夕希子の癖だった。甲^か高く聞こえるほど澄んだ声で、彼女はつづけた。

「生後まもなく小児マヒにかかり、二十数年間、身を起こすこともできずにいた娘を、老いさき短い父親が絞殺したという事件は、きのうの朝から、テレビや新聞などが、政府の医療行政、身障者対策の不備を衝^つくかたちで、するどく報道しておりますわね」

「ああ、それがどうしたっていうんだ」

「わたしどもの『女性世界』でも、今週発売の号はすでに印刷中なので、次号でこの問題をじっくりとりあげますが、できれば視点をもうすこしひろげて、三年前、この青森県北津軽郡増掛町でおきた病妻殺し事件……あのときも、安楽死の是非、社会問題として、ずいぶん騒が

れましたけど、それも含めて、現実には即しながら、安楽死や尊厳死の問題を真剣に考えてみたいんです」

「やめなさい」

坂本は、吐きすてた。

「女性週刊誌なんかやる仕事は、いたずらに事件の本質をゆがめてしまうだけだ。わしは協力できない、忙しいんだ」

「では、仕方がございません……」

夕希子は、シヨルダーバッグをとりあげて、踵を返しかけた。が、考える表情で足もとを見つめて、それからもう一度、坂本へ視線を戻した。

「あのう、日東新聞の通信部へは、ここからどう行ったらよろしいんでしょうか。津軽日報の通信部でもいいんです。教えていただけます？」

坂本は、ふとい眉をけわしく顰めて、しばらくは無言だった。だが、腹立たしげに指で髪をかきまわすと、意外なほど弱々しい声を出した。

「あんだ、どうしても太刀川徳太郎のことを書くのかね」

「もちろんですわ、毎朝さんにご協力いただけなければ、ほかの通信部をお訪ねするだけのことです」

「太刀川のことなら、だれよりも、わしがいつとくわしい……」

「ええ、社の資料室で三年前の各紙の切りぬきや縮刷版を見てきましたが、毎朝さんが、いちばん大きく論じていました。だから、わたし、駅からまっすぐ、こちらへ来たんです」

「あんだ、山本さんといったかね。本当におたくの雑誌では、はじめにあの事件の社会的な問題点だけをとりあげるのかね」

そこで夕希子は、はじめて笑顔になった。大新聞の地方記者は、いつもこうなのだ。女性週刊誌なんぞと、最初は押し売りでも追い払うような態度を見せて、結局は、他紙の記者に頼るなら自分のほうが……ということになる。

そうした経験を幾度も重ねてきている彼女は、このときの坂本健造の変化も、おなじものだと見てとった。

「うちのデスクは、事件を興味本位に見てはいけない、その根底にある社会と人間の在り方を直視せよって、いつも言うのです」

夕希子は、週刊「女性世界」副編集長の津村章吾が聞いたら、羞恥で弾ぜ返るだろうことを、存外、相手の

目をしっかりみつめてしゃべり、そのあとに、しれっとした調子でつけ加えた。

「当時の事件記録のファイル、ございますかしら。取材メモや写真など、なんでもけっこうです、ぜんぶ拝借したいんですけど」

2

分厚いその原稿用紙の束は、厚紙に挟んで黒い紐でとじてあった。表紙にはフェルトペンの字で、〈刑事第一審事件記録。件名・囑託殺。被告人・太刀川徳太郎〉とあり、ページをめくると埃のにおいがした。

山本夕希子は、この書類を坂本健造から借りると、増掛本町通りの角屋という旅館へはいった。いまはすっかり荒れて、池の水も干上がっていたが、かたちのよい石を配した中庭に面している離れの六畳へ通された。夕希子は丹前に着かえると、デコラ張りの小さな座卓の上に書類をひろげてみた。

坂本は、夕方、仕事がおわったら太刀川徳太郎の家へ案内しよう、と言った。それまでに、この事件記録に目を通しておきなさい、これはわしが裁判所へいって筆写

してきたものなのだ、と綴りを手渡ししてくれたのである。今度の取材は、坂本の協力で、かなり手間ははぶけそうだった。夕希子は軽い気持ちで、事件記録の最初のページから読んでいった。

起訴状 昭和四十九年二月十二日

本籍 青森県北津軽郡増掛町大字沼田三四

住所 同 増掛町西町一九五一

職業 金川木材工業所会計係

氏名 太刀川徳太郎（当五十七歳）

——公訴事実

被告人は、昭和四十六年十月下旬頃より狭心症発作をおこし、十二月六日から増掛町北川町北川病院へ入院加療中の妻、加津（当五十八歳）から、「寝ていても大儀で仕方がないから、あなたの手で殺してほしい」などと、しばしば依頼されていたものであるところ、昭和四十九年一月二十日夜、同女から「早く決心してほしい」旨、重ねて真剣に依頼され、同女の殺害を決意し、同月二十一日午前二時すぎごろ、同病院二一〇号室において、同室に持参していた木綿腰紐を同女の頸部に巻きつけて絞めつけ、間

もなくその場で窒息死させ、もって囑託をうけて殺害したものである。

——罪名罰条

囑託殺 刑法第二〇二条……

母屋の廊下を、音たかく踏み鳴らしながら子供が去っていった。十数室の客間を持つこの古びた旅館に、客は夕希子ひとりだけらしかった。子供は廊下の端まで走り、また駆け戻り、飽きることなくそれをくり返す。夕希子は腰を浮かしかけたが、そのとき、母親だろうか、夕希子には意味の判じがたい津軽弁で子供をたしなめる声をして、あたりはもとの静寂にもどった。夕希子は、ページをめくった。

第一回公判調書 昭和四十九年三月十三日

——検察官の意見

本件公訴事實は、各証拠により証明充分である。

本件は、社会一般がいう、いわゆる安楽死に該当しないことは、証拠調べの結果あきらかであると考ええる。加津が発病入院して以来、数回の心臓発作があり、ために脳軟化症をおこしていたことは明らかで

あるが、医師も自然の治癒は期待しがたいとしても、早急に死亡することは考えられず、栄養の補給さえよければ、相当期間生命を保ち得ると考えていた、と述べており、それを殺害に及んだ被告人の心情は理解しえない。人命は大切であり、夫としては、その申し出があつても叱つたり慰めたりして、生命をまっとうさせることが義務であつて……

夕希子は、そのあとを読みとばして、検事の論告の最後の部分だけを斜めに読んだ。

……被告に有利な情状としては、治療費がかさみ、金策に疲れ、また看病等で肉体的にも疲れ、本質を誤つて本件を犯したというやむをえざる点や、自首の事案であることを考慮し、相当法律を適用の上、被告人には懲役二年を相当と思路する。

これにつづく〈弁護人の意見〉は長い。被告人と被害者である妻の加津が、結婚から三十六年間、いかに苦楽をともした夫婦であるかを説き、妻の発病とともに、被告人がどれほど看護をつくしたか、^{疑々}と述べてい

る。そして、病苦にさいなまれる妻を見るに忍びず、なんとか早く楽にしてやりたいという気持ちに迫られたことは、なんら理解に難くないと、たっぷり感情をこめた字句をかきねているのだった。

夕希子は、その大時代な表現の個所だけを取材ノートにメモしはじめた。これは確かに「女性世界」向きの泣きネタだ、と思い、手なれた早さでボールペンを走らせたが、やがて、赤鉛筆でふとい傍線を引いてある数行に気づいて、ペンをとめた。そこには、こうあった。

世間では本件を「安楽死」と言っている。
二月四日付の週刊毎朝は、「マジメ人間、病妻を安楽死させる」と標題をつけ、本事件を報道している。一般社会人は安楽死という言葉の本件にあてはめて考えている。

赤鉛筆の線は、坂本健造が引いたものにちがいがなかった。安楽死は法律上認められてはいない。しかし弁護士は、この言葉が判事の心証に効果的にひびくことをねらって、マスコミが書きたてたそれをことさら引用して、本件はきわめて違法性が稀薄であると強調したわけだ。

そして坂本は、この個所を読んだとき、事件発生と同時に「安楽死」という文字を書きつづけてきた自分の記事によって、被告人が救済されたのだと信じ、満足感をおぼえたのだろう。

夕希子は、力をこめて引かれた赤い傍線を見つめて、坂本の顔を思い浮かべた。

坂本という男は、ひげをそって磨けば、美男と言われそうな輪郭なのに、三日も剃刀をあてていないような不精らしい顔をしていた。くぼんだ眼窩の奥の瞳が蒼色で、それが北辺の異人と思わせる陰気な印象だった。年齢をたずねたら、三十七だと言ったが、それよりかなり老けて見えた。

先刻は、その顔を紅潮させて、健康保険制度と病院の室料差額の問題などを、とうとうと、まくし立てたものだ。途中で、腰のまがった老婆が茶を運んできた。夕希子が、「お母さまですか」と挨拶をしかけると、坂本は、苦笑というよりは怒りを無理に笑いで押し隠す感じに頬をひきつらせて、「婆さま、も、去でけへ」と叱るような声を放った。なぜ、あんなにいやな顔をしたのだろう。あれは、めし炊きの雇い婆さんであつたらしいが、すると坂本は、まだ独身なのか。

それにしても、偏屈なあの坂本と、うちのデスクのちゃんを噛み合わせたら、どんな議論をするかしら？

考えてみて、夕希子は不意にくすぐられでもしたように、両肘をちぢめて、ふくみ笑いを洩らした。

「新聞記者は社会の木鐸^{ぼく}」^{（ぼく）}と言いついそうな律義な地方通信員と、東京・千代田区富士見町の近代的なビルにある編集室で、イタリヤ製のネクタイをすこしゆるめて横に流し、メタルフレームの薄く色のついたグラスの奥から、切れ長な目をいつも八方に配っている二十九歳の津村章吾とは、実際、人種がちがうと言ってもいいほどの相違がある。

そうだなあ、議論になったら章ちゃんは、あの咬い歯並びをわずかに見せて苦笑し、熱っぽく語りかけてくる坂本健造の言葉を、すべて軽くいなししてしまうだろうか。

想像が夕希子を衝き動かしした。津村の体臭が身近くせまってくる心地がして、たまらなく彼の声が聞きたくなつた。この旅館の客室には電話機が備えてない。夕希子は、読みさしの調書を伏せて立ちあがった。

長い廊下をわたって、薄暗い帳場をのぞくと、囲炉裏の切つてあるそこに人影はなかった。大声で呼ぶと、

白髪の老女が奥から歩み出て、隅の電話機を押し出した。

夕希子は自分で局をよび出し、東京の編集室につながるまでの短い時間、昼飯に丼ものでもとってほしい、と老女に頼んだ。黒光りする柱の八角時計が秒を刻む音と、囲炉裏にかけた鉄瓶のたぎる音だけが、いやに耳につく。真昼の往還に走る車の騒音もなく、ごく遠くで犬の吠える声が聞こえた。

「なんて静かな町なの……」

夕希子は、丹前の襟をかきあわせながらつぶやいた。

「はえ、そんですじや」

老女はうなずき、囲炉裏端に小さく坐つて茶をいれかける。そのとき、電話のベルが鳴った。受話機を耳に当てると、社の交換手の聞き馴れた声が伝わってきた。夕希子は、生き返った思いで、津村章吾をよんでほしいと言った。

「はい、津村です」

「あ、章ちゃん、わたしよ、夕希よ」

「おう、どうした？」

雑然とした編集室が、ブラインドのかかった大きな窓が、そこから洩れてくる春の日ざしと、そのむこうの晴